

八千代ゆかりの文学者たち

File1. 大久保康雄（1905～1987）



略歴

大久保康雄(おおくぼ やすお)、本名は保雄(やすお)。1905(明治 38)年八千代町大字芦ヶ谷(舟戸)に生まれる。慶應義塾大学英文科卒。英米文学者、翻訳家。

職業翻訳家の草分け的存在で、その活動は 1931(昭和 6)年に発行された『共産結婚』から 1980(昭和 55)年の『ヘンリー・ミラー(現代作家論)』まで、ほぼ半世紀に及んだ。白木茂、田中西二郎、中村能三、高橋豊、加島祥造らに下訳をまかせ、翻訳グループの名義人として、マーガレット・ミッチェルの名作『風と共に去りぬ』をはじめ、O・ヘンリー、マーク・トウイン、エラリー・クイーン、アーサー・コナン・ドイル、レイ・ブラットベリ等、純文学から SF・ミステリーまで、実に幅広い分野に渡る作品を日本の読者に届け、翻訳した作品は 100 点を超える。大久保の旺盛な翻訳活動とその功績を称え、大久保と交友のあった編集者の宮田昇は「翻訳の神々」の一人として大久保を紹介している。大久保は懐の深い人物で、特に用事がなくても、千葉縣市川市の大久保宅を訪ねる翻訳者や編集者が跡を絶たず、いっしょにゴルフや遊びに興じたという大久保の人柄を伝える逸話が残っている。



また活動は翻訳に留まらず、『今度は誰だ』や『生きる条件』などの新聞掲載小説や『アメリカ文学史』の執筆にも及んだ。

八千代町との関係

『八千代町史』には、「翻訳者大久保康雄」について、八千代町芦ヶ谷舟戸の出身で、安静小学校から父の勤めの関係で水戸中学校(現在の水戸一高)へ進学、そして慶應義塾大学で学んだ後、翻訳の道へと進み、『風と共に去りぬ』を翻訳したと囲み記事で紹介している。ミッチェルが『風と共に去りぬ』を発表したのは 1936 年、そして 2 年後には大久保訳が発行されたことから日米を問わず作品の反響が大きく、最晩年に発行された『アメリカ女流作家群像』では、マーガレット・ミッチェルの項を執筆したり、『タラの道—マーガレット・ミッチェルの生涯』を翻訳したりしたことから特に大久保の思い入れの強い作品、作家であったことが伺える。

なお、アメリカのアトランタ市にあるマーガレット ミッチェル 하우스記念館には世界各国で翻訳された『風と共に去りぬ』のなかに、大久保訳の本が展示されている。

参考資料

- ・『大久保康雄翻訳著作目録』 大久保康雄翻訳著作目録刊行会 1990年
- ・『日本近代文学大事典 机上版』 日本近代文学館編 講談社 1984年
- ・『日本現代文学大事典 人名・事項篇』 三好行雄ほか編 明治書院 1994年
- ・『戦後「翻訳」風雲録』 宮田昇 本の雑誌社 2000年
- ・市川市立図書館 HP 市川ゆかりの作家 大久保康雄
- ・『市川ひと事典'92』 市川ひと事典編集委員会 エピック 1992年
- ・『八千代町史 通史編』 八千代町史編さん委員会 八千代町 1987年

主な翻訳作品

作 品 名	作 者 名	出 版 社	刊行年
風と共に去りぬ	M・ミッチェル	三笠書房	1938-39
誰がために鐘は鳴る	E・ヘミングウェイ	三笠書房(のち新潮社)	1941
ジェーン・エア	C・ブロンテ	岡倉書房(のち新潮社)	1941
若草物語	L・オルコット	三笠書房	1950
トム・ソーヤーの冒険	M・トウエイン	三笠書房(のち新潮社)	1951
怒りの葡萄	J・スタインベック	六興出版社(のち新潮社)	1951
O・ヘンリー短編集	O・ヘンリー	新潮社	1953
北回帰線	H・ミラー	新潮社	1953
大地 『世界文学全集』	P・バック	河出書房	1955
Xの悲劇	E・クイーン	新潮社	1956
アクロイド殺人事件	A・クリスティ	東京創元社	1956
シャーロック・ホームズの事件簿	A・C・ドイル	早川書房	1958
ロリータ	V・ナブコフ	河出書房新社(のち新潮社)	1959

※ 詳しくは、『大久保康雄翻訳著作目録』をご覧ください。

さだまさしの自伝小説『ちゃんぽん食べたかった!』には、主人公の佐田雅志が千葉県市川市菅野の民家に間借りをしていた頃、駅前のおでん屋で偶然居合わせた大久保康雄の息子と知り合い、案内されるがまま、近くの大久保邸を訪ねた時の様子が描かれている。

作中、「子どもの頃から大久保康雄の訳した『トム・ソーヤーの冒険』で育ったから。あ、パール・バックの『大地』もそうだった」「尊敬する大久保康雄」「大久保康雄ったら、翻訳家の親分じゃない？」のほか、「“十五少年漂流記”は親父じゃねえよ。親類だけどあれは大久保昭男って人の仕事」の記述が見られる。

八千代ゆかりの文学者たち

File2. 大久保昭男 (1927 ~ 2024)

略歴

大久保昭男(おおくぼ てるお)、本名も同じだが、著者・訳者の略歴紹介では「あきお」の表記が多く見られる。

1927(昭和 2)年八千代町大字太田に生まれる。東京大学文学部卒。イタリア文学者及びフランス文学者(翻訳及び評論等)。大学でフランス文学を専攻し、後にイタリア語を独学で修め、イタリア文学に傾倒した。

1961年に初めて翻訳刊行した『喜びは死を超えて—セレーニ夫人の手記』が反響を呼び、以後本格的に翻訳家への道を歩み始める。現代イタリア文学の代表的作家である A・モラヴィア研究の第一人者として知られ、『無関心な人びと』『軽蔑』『ローマの女』『モラヴィア自伝』などの作品及び人物伝を多数、翻訳紹介し、またフランスの実存主義者 J・P・サルトルの『否認の思想』『サルトル対談集Ⅱ』を共訳したほか、『愛よ知よ永遠なれ』『ソ連邦史』(いずれも共訳)などの政治、社会思想関連の翻訳もある。

1997年に翻訳、発行したイタリアの社会学者アルベローニの『他人をほめる人、けなす人』は百万部を超える大ベストセラーとなり、以後「〇〇する人、しない人」のタイトル本の嚆矢となる。

また、回想記『故郷の風 イタリアの空』により 2006年茨城文学賞を受賞した。



八千代町との関係

小学校の高等科を卒業する昭和 17年春までを太田で過ごす。母方の先祖に幕末の漢学者中島砂山(片角)がいる。

2006年8月15日に刊行された『故郷の風 イタリアの空』は二部構成で、第一部「我が幼少年期」には幼少期の交友や思い出、太田集落の日常等が、第二部「我が愛せる書物、作家、友人たち」にはモラヴィア、彼の妻で作家のエルサ・モランテやダーチャ・マライーニ、若き日に傾倒し、影響を受けたスタンダールらの作品解説や人物評が描かれている。なお、本人によれば、英米文学者・翻訳家の大久保康雄は「近親とはいえないが遠縁の人」であり、若い頃、訪ねたことがあるという。

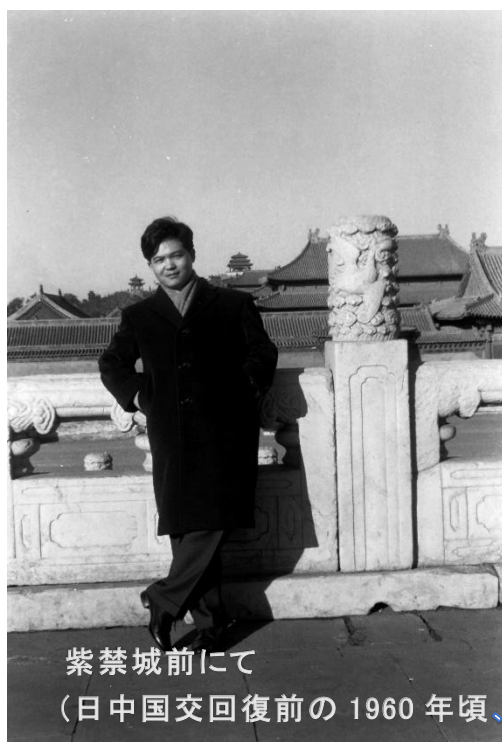
2005(平成 17)年 10月 15日に、八千代町立図書館において「私の昭和」と題する講演会を実施。

主な翻訳作品

作 品 名	作 者 名	出 版 社	刊行年
軽蔑	A・モラヴィア	至誠堂(のち角川書店)	1964
無関心な人びと	A・モラヴィア	早川書房(のち角川書店)	1965
イタリア使節の幕末見聞記	V・F・アルミニヨン	新人物往来社(のち講談社)	1987
十五少年漂流記	J・ベルヌ	ポプラ社	1984
ああ無常	V・ユゴー	ポプラ社	1985
カサノヴァ回想録 1.2	カサノヴァ	社会思想社	1986
母をたずねて	E・アミーチス	ポプラ社	1988
イタリアのむかし話	I・カルヴィーノ	偕成社	1989
モラヴィア自伝	A・モラヴィア/A・エルカン	河出書房新社	1992
雪の中の軍曹	M・R・ステルン	草思社	1994
声	D・マライーニ	中央公論社	1996
他人をほめる人、けなす人	F・アルペローニ	草思社	1997

参考資料

- ・『故郷の空 イタリアの風』 大久保昭男 2006年
- ・茨城新聞 2006年(平成18年)10月29日 地域(20) 遠藤さんら5人に文学賞
- ・茨城新聞 2006年(平成18年)10月30日 文化(7) 茨城文学賞 受賞者の横顔<上>



紫禁城前にて

(日中国交回復前の1960年頃、30歳代前半の写真と思われる)